

青年期のスターリン ― 神学校時代と流刑期のソソとコーバ ―

Stalin in his youth: Soso and Koba during the Russian Orthodox
Theological Seminary and interned years

小林 昭 菜*
Akina KOBAYASHI

概要：独裁者や世界の指導者の人となりを論じる作業は、長年研究者の間で続けられている。ウクライナ戦争（特別軍事作戦）が始まって2年が経過したが、戦争開始からプーチン論やプーチン体制論がアカデミアやマスコミの間で盛んに論じられるようになってきていることは、社会的にも広く良く知られていることだろう。そこで、本稿はプーチンが大統領就任以降国民の愛国心を「鼓舞」する傍らで評価をしてきた、独裁者スターリンに焦点を当てる。ことスターリンに関しては、晩年のスターリン、特に大祖国戦争で最も多くの犠牲者を出しつつも、ナチドイツを負かしてソ連を勝利へと導き、そして工業後進国であったソ連を戦後の秩序を決める権限を持つ戦勝国へと格上げさせ、さらに戦後は核兵器の製造に成功して核大国アメリカと対等な「熱戦」を繰り広げた「功績」について論じられることが多い。現在のロシア国民の持つ「神話」的なスターリン像もこれを追っている。しかし、「功績」の裏にある、独裁者の残虐性や非合理性は特に理解に苦しむことがある。本稿では彼の青年期、神学校時代と革命運動による逮捕と流刑の様子を考察し、のちの独裁者となる人物の人となりについて、一つの視座を与えたい。スターリン青年期を、神学校への進学による環境の変化、地下活動に目覚めての退学と逮捕、そしてシベリアへの流刑と追いながら、のちの「鋼鉄」の人スターリンの「足跡」を覗く。

キーワード：スターリン、ソソ、コーバ、イルクーツク、トゥルハンスク、ボリシェヴィキ、グルジア

Abstract : For many years researchers in the world have been discussing and examining the personalities of dictators and world leaders. Two years have passed since the Ukraine War (Special Military Operations) began, and it is widely known that theories of Putin and the Putin system have been actively discussed in academia and the media. This article focused on the dictator Stalin, not Putin, whom Putin has praised while “inspiring” the people’s patriotism since becoming president. Regarding Stalin, we tend to focus on Stalin’s “achievements” in his later years. For example, Stalin led the Soviet Union to victory over Nazi Germany in the Great Patriotic War (velikaya otechestvennaya voyna), despite suffering the highest number of casualties, and made the Soviet Union

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

a victorious nation and elevated it to a nuclear power. The current “mythical” image of Stalin held by the Russian people also follows this trend. However, the brutality and irrationality of this dictator that lie behind his “achievements” can be particularly difficult to understand. In this article, I will examine his youth, seminary days, and his arrest and exile due to revolutionary movements, and provide a perspective on the personality of the man who later became a dictator. This article examined the footprints of Stalin, a man of steel, by tracing his youth, including the changes in his environment as he entered a seminary, his expulsion and arrest when he became aware of his underground activities, and his exile to Siberia.

Keywords : Stalin, Soso, Koba, Irkutsk, Turukhansk, Bolshevik, Georgia

はじめに

ウクライナ戦争（特別軍事作戦）が始まって2年が経過した。戦争開始から開戦を選択した人物という要素を含むプーチン論やプーチン体制論がアカデミアやマスコミの間で盛んに論じられるようになっている¹。しかし、現時点でまだ継続中のプーチン政権を評価することは時期尚早である。そこで、本稿はプーチンが大統領就任以降国民の愛国心を「鼓舞」する傍らで評価をしてきた独裁者スターリンに焦点を当てる。ことスターリンに関しては、ソ連を専制的な独裁体制へと転化させたソビエト連邦以降のスターリンについて注目されがちであるが、本稿では彼の青年期、神学校時代と革命運動による逮捕と流刑の様子を考察する。スターリンの周囲から見た彼の評価、彼の性質や性格の傾向を検討してみたい。

本題へ入る前にロシア国民のイメージするスターリン像について若干触れておきたい。スターリンは既に広く知られている通り、レーニンが死去したのち、1924年に政権を掌握した。政権を掌握して以降のスターリンの「功績」は幅広く研究されている。例えば、1930年代の工業化、農業集団化、抵抗する者たちへの徹底した粛清はもちろんのこと、1940年代の大祖国戦争（第二次世界大戦）、米ソ冷戦などである。スターリンは大祖国戦争で最も多くの犠牲者を出しつつも、ナチドイツを負かしてソ連を勝利へと導き、そして工業後進国であったソ連を戦後の秩序を決める権限を持つ戦勝国へと格上げさせ、さらに戦後は核兵器の製造に成功して核大国アメリカと対等な「熱戦」を繰り広げた。晩年のスターリンの評価は、現在のロシア国民の持つ「神話」的なスターリン像である。

スターリンをどう評価するかについて、連邦崩壊後のロシアでは賛否あるようだが、近年はロシア国民の半数が肯定的な評価をしていることも注目すべきであろう。連邦の崩壊から30年の間に、ロシアの世論は次のように変化してきている。露独立系世論調査機関「レヴァダセンター」が実施した「スターリンが偉大な指導者であったとの意見に賛成かどうか」の調査結果を見てみよう²（表1）。1992年4月は、「おおむね賛成」と「全く賛成」とが29%（全

¹ 例えば、BBC 海外特派員だったフィリップ・ショートによるプーチンの伝記（Philip Short, *Putin: His Life & Times*, The Bodley Head: London, 2022.）、下斗米伸夫『プーチン戦争の論理』集英社新書 2022 年などがある。

² 表1の出典は以下の通り。<https://www.levada.ru/2021/06/23/otnoshenie-k-stalinu-rossiya-i-ukraina/> 合計が100%を超える・満たない時期があるが、原文ママ記載した。

く賛成は16%)で、2016年3月は、「おおむね賛成」と「全く賛成」とが28%（「全く賛成」は8%）、「ある程度賛成」が42%であった。さらに、2021年5月の調査では、「おおむね賛成」と「全く賛成」とを合わせて56%に達し、「ある程度賛成」の回答は27%であった。つまり、スターリンの評価を連邦崩壊直後と現在とで比較すると、肯定的な評価がここ30年の間に29%も高まってきていることが分かる。（この背景には、プーチン

のスターリン観も当然影響しているが本稿では割愛する。）スターリン政権はソ連・ロシアの歴史上もっとも長い29年にも及んだ。（ちなみにプーチン政権は2024年現在、メドヴェージェフ大統領期も併せると24年であり、スターリンに次いだ長期政権である。）長期にわたり国を治めた20世紀の独裁者スターリンと21世紀の長寿政権の立役者プーチンとの比較は、今後の課題であろう。

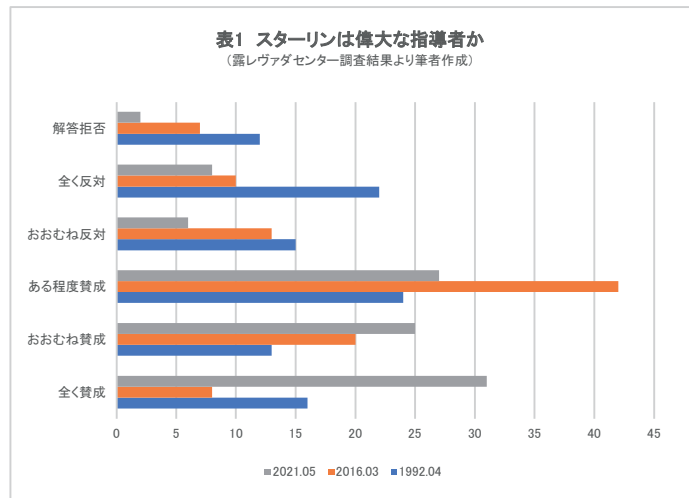
独裁者の残虐性や非合理性は、時に理解に苦しむ場合がある。本稿ではスターリンの青年期に焦点を当て、のちの独裁者となる人物の人となりについて、一つの視座を与えたい。筆者はスターリンの転機は神学校への進学、退学、そして逮捕とシベリアへの流刑だと考える。まずはスターリンの生い立ち、神学校での様子から見てみよう。

ソソの生い立ち

スターリン（「鋼鉄」）の名で知られている、ロシアの独裁者、ヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・ジュガシヴィリ（Joseph V. Stalin）（愛称ソソ）は、1878年12月18日グルジア（ジョージア）の首都チフリス（トビリシ）の小さな町ゴリに生まれた。（ソソの生年月日には二つの説がある。既述の生年月日は、グルジアのゴリにあるウスペンスキー大聖堂に記録された出生日で、そのほかにソ連の公式文書で1879年12月21日と記されているものがある³。）ゴリの町は平らな丘陵の上に高く設けられた要塞を振り仰ぎ、カスピ海沿岸のバクーと黒海沿岸のバツミを結ぶ鉄道沿いに位置していた。1890年代にゴリを訪れた作家のマキシム・ゴーリキーは、「風変わりな野蛮なほど原始的」とゴリを表現している⁴。ソソの父、ヴィッサリオン・イヴァノヴィチ・ジュガシヴィリ（愛称ベソ）（Besarion I. Jughashvili）は、農奴解放後に成人して靴職人として働いていた。仕事の初期は、40人ほどの職人を雇い、酒に溺れるまではプチブルの身分であった。母エカチェリーナ・ゲオルギエヴナ・ゲラツェ（愛称ケケ）（Ekaterina G. Geladze）は、農奴の娘で、彼女はオセット人であったという。オセット人は山岳民族で内省的、見知らぬ者に対して疑い深く、争いごとの技術にたけているため、帝政時代は警官や看守としての需要が多かったという。ジュガシヴィリ家は悲惨なほど貧しく、家はほとんどあばら家同然であった。壁は木造、床は土間、天井は板張り、部屋は二部屋だけだった。ジュガシヴィリ

³ 横手慎二『スターリン「非道の独裁者」の実像』中公新書、2022年第8版、4頁。

⁴ アレクス・ジョンジュ（中澤孝之訳）『スターリン』心交社、1989年、16頁。



家は一方の部屋に、もう一方は家主が済んでいた。(ただし、ソソの生い立ちは、プロレタリア階級出身であることを強調するため、スターリンの政権掌握以降に出来るだけみすばらしいものに脚色されたところがあることから、ソソの家庭的背景は慎重に扱う必要がある⁵⁾。)

ロシア帝国の辺境に住む、農奴出身の貧しい夫婦のもとに育ったソソの幼少期は、父による飲酒と暴力に悩まされるものだった。父親が酔って母やソソに暴力をふるうことが日常であった。ただし、帝政末期の混乱期に父親が酒を飲み憂さを晴らす光景は、ロシアの至る所で見られたから、父親の暴力、貧困、母親の子への偏った愛情と期待が独裁者スターリンを生み出したとみるのは稚拙な見方である。

神学校時代のソソ

母エカチェリーナは、ソソの他二人の息子が早くに亡くなったことも重なって、ソソをいっそう大事に育てた。彼女は教育熱心な母親としても度々語られており、給仕婦として貰うわずかな給与を捻出して、初等学校を卒業したソソを神学校に通わせた。当時のロシアには、四年生の初等学校と六年生の中等学校からなる神学校網が全域にあり、一般のカリキュラムのほか、教会スラヴ語、ギリシャ語、ラテン語を学習できた。

ソソは、ゴリにある神学校に1888年から通い始めた。ちなみにソソは初等教育に六年かかり、中等学校は革命運動のため五年で中退している⁶⁾。父ヴィッサリオンは靴職人としての技術を仕込もうと（実際はソソを自身の酒代に利用しよう）、学校からソソを取り戻そうとしたこともあったが、教育熱心なエカチェリーナやソソは、これにできる限り反抗した⁷⁾。息子の将来や家族に対する態度が非対照な両親の姿を見ていたせいか、ソソは利発で向上心のある、成績優秀な子供として育った。

神学校でソソは帝政ロシアが強要するロシア化政策を体験した。最初の2年間はグルジア人からグルジア語で教育が行われたが、その後教師の大半がロシア人に取って代わり、ロシア語が授業用語になった。そこではグルジア人のロシア化が推奨された。生徒たちは、グルジア人がロシア人教師から文化的に劣等とされていると感じ取っていた。またこれに憤慨もしていた。ただし、ソソはこのような環境のもとで、権威に反抗心を持ってはいたが、同時に権威に感銘もしていたようである。ソソのロシア語は神学校でよりいっそうブラッシュアップされた。ソソは、それまで生きてきた自分自身や環境に対する劣等感と、ロシア文化の高度な水準とのギャップを良く理解していた⁸⁾。

神学校でのソソは、とにかく勉強ができた。特に彼が好んで学んだのは、歴史、論理、文学であった。ソソの文学好きは有名で、ネクラソフ (Nikolay A. Nekrasov)、プーシキン (Alexander S. Pushkin)、ウォルター・ホイットマン (Walter Whitman) の詩の暗記、ゲーテとシェークスピアの翻訳版を読み、グルジア詩人たちについて熱く語ることができた⁹⁾。自作の詩を書くこともあった。神学校での成績は優秀で、学年8番を取めたこともあった。グルジ

⁵⁾ 同上、16-17 頁。

⁶⁾ 木村英亮「ザカフカース時代のスターリン」横浜国立大学人文紀要第一類哲学社会学、1979 年、15 頁。

⁷⁾ 横手、前掲書、7 頁、サイモン・セバーク・モンテフォーリ (松本幸重 訳)『スターリン 青春と革命の時代』白水社、2010 年、113-114 頁。

⁸⁾ ジョンジュ、前掲書、20 頁。

⁹⁾ モンテフィオーリ、前掲書、118 頁。

ア嫌いの教師たちでさえ、ソソの知識に感心した。1894年から1895年の間には、グルジア唱歌と言語でオール5点を、聖書でも同等の評価をもらい、操行で「秀」をもらう模範生であった。（ソソの歌唱は十分プロになれると言われていた。）神学校の当時の友人からは「おとなしく、注意深く話を聴き、控えめで、恥ずかしがり屋」な生徒と見られていた¹⁰。

母の期待に十分応える学校生活であった一方で、神学校に入学した後のソソは考え込む姿勢を見せ、内に閉じこもっていたという証言もある。ソソが日常的に抱えた問題は内的なものとの外的なものに分けられる。内的要因は、母の期待に応えるための勉学、母の過干渉への対応（母がソソの学校で裁縫と給仕の仕事を見つけて近くにしようとしたこともあった）、父による金銭の要求（学校までやってきて酒代を無心した）、貧困家庭ゆえ学校に学費の援助を請わねばならない「負い目」、聖歌隊での小遣い稼ぎであった¹¹。外的要因は、帝政ロシアの行き詰まり、チフリス神学校の厳格で排他的な校則、複数の民族が雑居するグルジアの格差と混沌さへの不満であった。

外的要因について少し補足しよう。チフリス神学校は、後述しているが、グルジアで最も「反骨精神」のある教育施設の一つと評判が高かった¹²。当時のチフリスは、人口16万人の都市で、住民の30%はロシア人で、そのほかアルメニア人30%、グルジア人26%、残りは少数のユダヤ人、ペルシャ人、タタール人で構成されていた。アルメニア語新聞は6紙、ロシア語新聞は5紙、グルジア語新聞は4紙出ていた。チフリスの労働者たちは、主に鉄道機関庫と小さな仕事場で働き、富裕層はアルメニア人大実業家、グルジア人侯爵、ツァーリの総督の宮廷に集まるロシア人官僚や將軍らであった。チフリスの飲料水は山岳地帯の西部ラチャから運ばれ、石工はギリシャ人、仕立屋はユダヤ人、浴場はペルシャ人の持ち場であった。モンテフォーリによれば、このコスモポリタンともいえる都市チフリスにて、グルジア民族主義や国際マルクス主義が浸透したのは、自然な流れだったという¹³。革命が起こる前のロシアは、人口の80%以上が農村に住み、農村の住民は伝統的な生活様式、行動規則、規範を堅持していた。帝国内の多くの民族は、文明化の影響に浴することはなく、富裕層と貧困層の分断は明白な状態にあった。識字率はヨーロッパ最下位のレベルにあり、1897年の時点で21.2%しかなかった。最高学府を卒業した者は、100人に1人、中等教育は100人に4人の割合であった¹⁴。このことから、貧困家庭のエカチェリーナがいかに教育熱心な母親であったかが分かるだろう。

ソソの革命家への転身は、決して貧窮家庭出身、父からの暴力というバックグラウンドが原因ではなかった。そもそも神学校へ入学した時点でソソは、確固とした反骨精神、政治的信条、民族主義的意識を持っていなかった。そういう意味で、チフリス神学校はソソを大きく変える「功績」を残した。彼の在学期間中に学内外で得た経験は、民族問題の是正や帝政ロシア批判へと後にソソを導く布石となった。例えば、神学校では「グルジア語は犬の言葉だ」と厳格にグルジア語、グルジア史、グルジア文学が禁止された。（この発言をした校長はのちにグルジアの「ハンジャリ」短剣で生徒に殺傷された。）グルジア人であることを誇りにしている生徒たちにとって、教師からグルジア的なものをうかがわせる一切のものを禁止された経験は大き

¹⁰ 同上、94、112-113、116頁。

¹¹ 同上、113頁。

¹² アレクサンドル・ダニロフ他、（吉田衆一監修）『ロシアの歴史 下』明石書店、2011年411頁。

¹³ モンテフィオーリ、前掲書、120-121頁。

¹⁴ ダニロフ、前掲書、233-234頁。

かった。それだけでなく、トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフを含めて、プーシキン以降に刊行された文学も禁止された¹⁵。ソソはプーシキン以後の文学に関心を持っていたから、これらを隠れて読むしかなかった。厳格という言葉以上に排他的とも言える神学校の管理体制は、抵抗者や反抗者を生み、のちに「チフリス神学校ほど多くの無神論者を生み出したところはない」と言われるほどであった。ソソがこのような環境下において、自らのルーツであるグルジアを強く意識するようになったのは当然である。彼は自らをグルジア人として明確に意識していると読み取れる詩を、在学中にしたためていた。ペンネーム「ソセロ」の名で、「朝」という詩がこれに当たる。

バラのつぼみはもう開き、スマレに手を伸べ、たわむれた。
ユリはようやく目を覚まし、頭を下げてそよ風を浴びていた。
ヒバリは雲間高く舞い上がって、にぎやかに歌をさえずっていた。
ほがらかなナイチンゲールは、優しい声で歌っていた—
花であふれなさい、麗しき土地よ、イヴェリアの地を楽しませなさい。
そしてあなたはグルジア人として、勉学に励み、母なる国を喜ばせなさい¹⁶。

ここで言う「母なる国」は帝政ロシアではなく、グルジアのことだろう。ソソの詩の才能は、評価が高かった。グルジア愛国主義者でグルジア文学者、政治家でもあったイリヤ・チャヴチャヴァゼ (Ilia Chavchavadze) (1837-1907) が「朝」を含むその他ソソの詩を高く評価していた。

ところが、ソソは 17 歳の時、「私は詩を書くのに興味をなくした。詩作はあらゆる注意力と、とてつもない量の根気を要求するからね。それにあの頃の私はまるで水銀のように流動的だった」と、聖職者になる勉強に興味を失い、詩作にも興味を失った心情を吐露していた。ソソは最初の 2 年間こそ成績の上位を維持し続けたが、その後は正教会の歴史や聖人の伝記の講義を聞くことはなくなっていった。「イエズス会的」教育に嫌気が差したのか、この時期学年の成績順位は 5 番から 16 番に滑り落ちた¹⁷。

神学校は厳格な規律と硬直した教育制度でもって、グルジア人をロシア化させるよう努めていた。ソソは監視されることがどんなものかを神学校で体験することとなった。学校時代を振り返ったスターリンは次のように述べている。「たとえば、寄宿舎ではスパイ行為が行われていた。午前 9 時にお茶の時間を告げるベルが鳴る。われわれは食堂に行く。そして自分の部屋に戻ってくると、誰かがわれわれの戸棚の引き出しをあさり、かき回した気配を感じたものである¹⁸。」

ソソは、15 歳の時にザカフカースにいたロシア人マルクス主義者の地下グループと関係を持つようになって、革命運動に参加するようになったと後に述べているが¹⁹、この時はまだ神学校時代の成績優秀な時期であったと思われることから、スターリンの政権掌握後に書き換えられたものかもしれない。または、在学時代に社会主義研究の討論会に参加していたことを「革

¹⁵ モンテフィオーリ、前掲書、111-112 頁。

¹⁶ 同上、56 頁。

¹⁷ 同上、119、123 頁。

¹⁸ ジョンジュ、前掲書、22 頁。

¹⁹ 横手、前掲書、44 頁。

命運動に参加するようになった」と記した可能性もある²⁰。とにかく、政治的信条や民族意識をとにかく持たない状態でチフリス神学校に入学したソソが、周辺環境によって瞬く間に若き革命家へと転身したことは確かである。チフリス神学校はこの意味で、「偉大な功績」を残した。その証拠に、1931年にドイツ人作家エミール・ルードヴィッヒのインタビューに答えたスターリンは、革命運動へ参加した理由を、神学校の「人を馬鹿にするような制度とイエズス会的方法」に反発したため、と述べている²¹。優等生だったソソは反抗する問題児へと「転落」した。1897年までに、ソソは禁書を読んで13回捕まり、警告を9回受けた²²。1898年10月及び11月の素行記録では、朝の祈祷への欠席、典礼の際の規律違反、教師に挨拶をしなかった、教会内で笑い声を立てた、所持品検査時の言い争いといったことが理由で、懲罰や嚴重戒告の処罰を受けていた²³。ソソは無作法になり、散髪を拒否し長髪にした。監禁室に閉じ込められたことも幾度もあった。

問題行動はソソ以外の生徒も頻繁に起こしていた。ソソが進学する前からチフリス神学校では、その排他的な教育ゆえ、生徒たちの間に抵抗心を容易に生み出す環境ができていた。神学校は、ロシア人教師たちによるグルジア文化への侮蔑的言動、早朝から夜まで決められたカリキュラムへの服従、課外時間の生徒の素行への監視が日常であった。生徒たちが神学校の方針に激しく抗議すれば、それに反応して神学校が厳格な処分を下すということがよくあった。チフリス神学校は悪名高き学校となっていた。生徒による校長の殴打事件や校長刺殺事件、多数のストライキの組織もあった。チフリス神学校は、こういった素行の悪い多数の生徒たちを懲罰・退学へと追い込んだ²⁴。

このような状態であったから、ロシア帝政末期にいよいよ社会不安が高まると、生徒たちはあらゆる場面で「爆発」を起こした。帝政批判、自由主義思想、民族主義がロシア全土に広まり、チフリスにもその波が押し寄せた時、ゴリの生徒たちがこれに共鳴しないわけがなかった。チフリス神学校では、多くの退学者、無神論者、革命家を生み出し、1899年5月にソソも退学してロシア社会民主労働党に加わった。神学校での退学理由は理由なく試験に参加しなかったこととされた²⁵。母は唯一の息子の将来にと、必死に学費の工面をし、父の妨害があっても盾となり息子の教育に身を捧げたわけであったが、その神学校がソソを革命家へと育てることになった。

コーバのシベリア体験

ソソは、チフリス神学校退学後、自身を「コーバ」と署名するようになった（1899年から使うようになったという説と、1906年半ばからこの名を利用するようになったという説がある²⁶）。既述の通りチフリスでは、帝政末期の混乱が押し寄せ、労働者の賃上げ要求デモの発生、社会民主主義（マルクス主義）の組織が台頭していた。1900年から1901年のチフリスでは、ストライキが急増し、その弾圧が日常的に発生していた。コーバは当初社会主義思想を勉強す

²⁰ ジョンジュ、前掲書、23頁。

²¹ 横手、前掲書、43-44頁。

²² モンテフィオーリ、前掲書、132頁。

²³ 横手、前掲書、53頁。

²⁴ 同上、44-46頁。

²⁵ 同上、54-56頁。

²⁶ 同上、65頁。

ることより、革命運動に熱中していた。貧困家庭に育った「負い目」が、彼をより階級闘争へと駆り立てたのかもしれない。革命運動に参加した最初の頃は、格別目覚ましい理解力や活動能力を示すことはなかった。功名心や支配欲というよりも、革命的ロマンティズムが彼を突き動かしていた²⁷。

1901年11月、コーバはチフリス社会民主委員に選出され、同月にグルジア南西部のバトゥミへ派遣された。バトゥミでは、1902年2月に大規模なストライキが発生した。これは1901年末にチフリス社会民主委員会のイニシアチブで組織された、バトゥミ委員会が先導したものだった。きっかけは1902年2月27日のロスチャイルド石油精製工場の労働者400人の突然の解雇であった。彼らは革命運動に参加しているとの疑いで失職させられた。バトゥミのストライキ委員会は、解雇者の復職、賃上げ、労働日の短縮などを訴えて軍総督との交渉に臨んだが、3月8日に32人が逮捕、抗議デモで300人が逮捕された。翌3月9日にはおよそ6000人の抗議デモが続けて発生したが、軍がデモ隊に発砲して15人が死亡、54人が負傷した。デモで死亡した労働者らの葬儀が3月12日に開かれ、これに5000人が参加した。しかし軍はそこで参加者の大量逮捕を実施した²⁸。コーバ自身は、バトゥミでのストライキがきっかけで、他の委員と共に会合中に逮捕され、投獄された。

コーバは優等生から問題児へ、そしてついに被疑者となった。バトゥミの監獄でのコーバは「むさくるしさ、あばた顔、まばらなあごひげ、後ろへ撫でつけた長髪」で、冷ややかなスフィックスそっくりであった²⁹。しかしコーバは、神学校での問題児のごとく「勇敢」であり続け、看守の買収や彼らの同情を利用した面倒ごとを繰り返し起こしていた。そういったコーバの行動は、監獄当局から一目置かれていた³⁰。ただ、幾度も厄介ごとを作って看守の手を焼く「不屈の闘士」の姿とは裏腹に、コーバは自身の心臓（または肺）の病気と母親の高齢を理由に、複数回にわたってコーカサス総督へ自らの釈放を懇願していた。彼のしたたかな面が次のように現れている。

「私の悪化する咳と、12年前に夫に去られ、私しか頼る者がいない老母の哀れな境遇に鑑みて、余儀なく閣下に、警察の監視下でのささやかな放免を改めてお願いするしだいです。私の要請に留意され、私の嘆願にお応えくださるようお願いいたします。」

J・ジュガシヴィリ 1902年11月23日³¹

当然コーカサス総督はコーバの特別待遇の願いを受け入れることはしなかった。それだけでなく、コーバに刑期3年の流刑を科し、さらに気候的に過ごしやすいグルジアから東シベリアへ流刑させることにした。コーバのシベリア体験の始まりである。コーバは、1903年11月にイルクーツクのノーヴァヤ・ウダへ送られた。そこはグルジアの気候とは異なり過酷な寒さが待ち受けていた。流刑先イルクーツクまでの道中で、コーバの所持金は尽きてしまった。グルジアを出発してロシア南部のロストフ・ナ・ドヌーに着いた時には、バトゥミへ追加送金を依

²⁷ 同上、56頁。

²⁸ 木村、前掲論文、17-18頁。

²⁹ モンテフィオーリ、前掲書、185頁。

³⁰ 同上、190頁。

³¹ 同上、191頁。

頼する電報を送っている。これは流刑であっても移動時の費用は被疑者自身が賄っていたロシアの事情がある。例えば、当時流刑地までの移動は、裕福な革命家や富裕層は自腹で一等車に乗り、休暇を取るかのように過ごしていた。しかし貧困家庭出身のコーバはそういった流刑の「休暇旅行」とは無縁であった。

コーバは流刑地ノーヴァヤ・ウダに到着するやいなや、他の流刑者と同じようにそこからの脱走を計画し始めた。帝政ロシア時代の流刑は、ソ連時代よりも厳格でなく、囚人たちは単に指定された場所に住み（地元の少数民族の家で同居など）、定期的に警察に報告するよう命じられたのみであった³²。コーバのこのシベリア経験は、のちにソ連の囚人、政治犯、外国人捕虜の「シベリア送り」にて、厳格な収容所管理体制を生む土壌を作ったかもしれない。イルクーツクからの脱走にはおよそ 100 ルーブルを要したが（食料、衣類、汽車の切符、賄賂）、コーバはなんとかこれを工面することができた。おそらく母親経由で頼まれた仲間たちがソソへ送金したのでだろう。当時脱走資金の調達には珍しいことではなかった。例えば、1906 年から 1909 年までの期間で、3 万 2000 人の流刑者のうち、1 万 8000 人を超す流刑者が何らかの方法で脱走資金を調達していた³³。コーバの脱走は 1904 年 1 月、母ケケから送られた防寒着に守られて極寒のマイナス 40 度の中決行された。彼はウラルを越えて 10 日ほどでチフリスへ戻った。到着したところには、すっかりやせ細り、誰だか分からないほどであった³⁴。

コーバがシベリアにいる間、ロシア社会民主労働党（1898 年に創設）は、ボリシェビキとメンシェヴィキに分裂した。「無事に」脱走したコーバは、党のグルジア語非合法新聞『プロレタリアティス・ブルゾラ（プロレタリアートの闘争）』の編集と執筆に携わるようになった。憲兵たちは「ジュガシヴィリは流刑地から脱走し、現在グルジア労働者党の一指導者である」との情報を知り、必死にコーバの行方を追った。結局のところコーバは憲兵に見つかり逮捕された。しかし収監されたチフリスのオルタチャラ監獄から再びコーバは脱走した³⁵。

監獄や流刑先の警備が厳重でなかったのは当時の帝政ロシアの特徴だが、この後ロシア国内に臨時政府ができるまで、コーバの生活は複数回にわたって逮捕と流刑を繰り返した。少なくとも 1902 年から 1913 年までの間に、8 回の逮捕と 7 回の流刑、6 回の脱走を行った³⁶。（9 回の逮捕、4 回の短期拘留、8 回の流刑地脱走を行ったという記録もある³⁷。）コーバの罪状は、労働者の扇動、武器の強奪、党員の脱獄援助、大企業との取引や強盗による党の活動資金の調達であった。逮捕と脱走を繰り返すコーバは、ほかに複数の偽名も持ち、偽名での身分証明書も作っていた。コーバの流刑の概略は後述の通りだが、彼はひそかにペテルブルグやカフカースへ行き、逮捕されないうちに流刑地へ戻るという離れ業も使っていた。

1902 年 3 月、バトゥミで逮捕。

1903 年 11 月、イルクーツクへ流刑。

1904 年 1 月、脱走しチフリスへ戻る。

1904 年 10 月、逮捕されチフリスのオルタチャラ監獄へ。

³² ジョンジュ、前掲書、38 頁。

³³ モンテフィオーリ、前掲書、204 頁。

³⁴ 同上、206-207 頁。

³⁵ 同上、219、221 頁。

³⁶ ダニロフ、前掲書、412 頁。

³⁷ モンテフィオーリ、前掲書、204 頁。

1905 年 4 月、逮捕されチフリスのオルタチャラ監獄へ。
 1908 年 8 月、逮捕。1909 年 6 月のヴォログダの流刑先から脱走。
 1910 年 3 月、バクーで地下活動中に逮捕。その後 1911 年 6 月に刑期満了で釈放。
 1911 年 9 月、近寄ることが禁じられていたペテルブルグにいたことが判明し、逮捕。再度ヴォログダに流刑。
 1912 年 2 月、ヴォログダから脱走。
 1912 年 4 月、逮捕。シベリアのナルィムに流刑。
 1912 年 9 月、脱走。
 1913 年 2 月、ペテルブルグ滞在中に逮捕。シベリア、エニセイ河近くの町トゥルハンスクに流刑。流刑生活は 4 年続き、1917 年春に首都で革命が勃発したことをうけて自由の身になる³⁸。

スターリンの猜疑心は繰り返しの逮捕とシベリアへの流刑の間に培われたのだろう。コーバは、逮捕、流刑、脱走を繰り返す中で、何度も変装を見破られた。そして密告、逮捕、尋問を経験した。この経験はコーバの観察眼を鋭くさせ、他人を容易に信じない性格をつくり、近寄ってくる者が敵か味方か常に判断する思考癖を身に着けさせた³⁹。憲兵隊当局は、コーバが「完璧な注意力を払って身を処し、歩く時は不断に後ろを振り返る」人物と記録している⁴⁰。

極寒の地トゥルハンスクへの流刑

流刑されては脱走を繰り返すコーバに対して、ついに帝政当局（オフラナ）は 1913 年、極北のトゥルハンスク地方（現クラスノヤルスク地方トゥルハンスク地区）への流刑を命じた。帝政ロシアやその後のスターリン期のソ連が流刑地として使用した、脱走が極めて困難な極寒の地である。人口は当時 1 万 2000 人ほどの、タイガ、ツンドラの地である。冬は年間を通して 9 カ月続き、最低気温はマイナス 60 度まで下がる。村と村の間は遠く離れ、村人はシャーマンを信仰するツングース人、オスチャク人（ケット人やハンティ人など）、そしてトナカイがわずかに点在するだけである⁴¹。

トゥルハンスクでの厳しい生活は、コーバに衝撃を与えた。そこでの冬はそれまでの人生で経験したどんな冬よりも厳しく、荒涼としたものだった。ロシア国内の流刑地の大部分が民家での休暇のようなものだとしたら、トゥルハンスクは緩慢死であった。流刑者の多くが極端な気候が原因で死んだ。11 月初旬までに気温はマイナス 33 度になり、真冬にはマイナス 50 度に達した。唾液は唇で凍り、息は結晶になった。コーバはトゥルハンスクでシベリア猟師の自力依存、用心深さ、厳しさ、孤独を知った⁴²。後年スターリンは娘に、この地で初めてロシアというものが分かったのだと言った⁴³。シベリア体験は、生涯スターリンの記憶に残っていた。

コーバは流刑先で他の囚人たちと協力して生活することを好まなかった。また囚人たちも彼

³⁸ 横手慎二の前掲書 80-81 頁をもとに、モンテフィオーリ、ジョンジュを引用し筆者作成。

³⁹ 横手慎二、前掲書、81 頁。

⁴⁰ オレグ・V・フレヴニューク（石井規衛訳）『スターリン』白水社、2021 年、50 頁。

⁴¹ モンテフィオーリ、前掲書、453 頁。

⁴² 同上、456 頁。

⁴³ ジョンジュ、前掲書、78 頁。

を歓迎しなかった。トゥルハンスクに到着したころのコーバについて、同地で服役していた年配ポリシェビキのウェーラ・シュバイツェルが次のように言っている。

「コーバがトゥルハンスク地方にやってくると……われわれは全員で彼をボイコットすることに決めた。彼は断固たる出世第一主義者で陰謀家であり、どんなアナーキーな行動もできるという評判であった⁴⁴。」

コーバは、出世第一主義者、陰謀家、そして目的のために手段を選ばないアナーキストとして周囲から否定的な印象を持たれていたようだ。コーバが流刑されてから2週間の間に、一人の流刑者が川で溺れて亡くなった。この時、その流刑者は複数の書籍を持っていた。人の往来の少ない極北地での活字は貴重品である。通常、遺品は流刑者同士で平等に分配するのが慣わしだったが、コーバは分配を拒否し、書籍を全て自分のものにした。外から隔離されたトゥルハンスクでは、些細なもめごとを軸に動いていたから、「本泥棒」のコーバは仲間から追放され、別の村コステノへ移送されることになった。コステノ村でコーバはかつての友人である、ロシア社会民主労働党員でユダヤ系ロシア人のヤコフ・ミハイロヴィチ・スヴェルドロフ（Yakov M. Sverdlov）が近くのセリヴァニハ村にいることを知った。（スヴェルドロフは1919年にスペイン風邪で死去する）。コーバはスヴェルドロフを訪ねた。スヴェルドロフとコーバとの流刑地での再会はこれで二度目であった。両者は共に脱走を計画することになり、そのための資金も集まったが、革命家でありながら警察のスパイでもあったマリノフスキー（Roman V. Malinovsky）の密告に合い失敗した。脱走計画が失敗したあと、両者ともに他に流刑者がいない北極圏のクレイカに送られることになった。1914年3月、特別に二人に付いた武装監視人と共に、彼らはクレイカへ到着した⁴⁵。

スヴェルドロフは、コーバと一緒に住むようになって10日ほどで、「彼は毎日の生活であまりにも個人主義者でありすぎる。」と手紙に書いている⁴⁶。そして、コーバの生活態度について次のような不満を残している。

「今度の場所での暮らしは以前よりずっと悪い。一つの部屋を共有していることがその原因だ。そこに私たち二人がいる。相棒は旧知のグルジア人のジュガシヴィリで、もっと前の流刑時代からの知り合いだ。彼はいい奴だが、日常生活であまりに自分勝手にやろうとしすぎる。私はある程度きちんとしているのが好きだから、ときどきいらいらすることがあるが、心配は無用だ⁴⁷。」

スヴェルドロフも、コーバの冷酷無情な性質を早い段階で感知していたことに注目したい。スヴェルドロフはコーバを自分勝手な人間と認識していた。その二カ月後、二人は次のように決裂した。

⁴⁴ 同上、75頁。

⁴⁵ モンテフィオーリ、前掲書、454-461頁。

⁴⁶ 同上、463頁。

⁴⁷ ジョンジュ、前掲書、75頁。

「こちらでは私〔スヴェルドロフ〕は一人の同志〔コーバ〕と一緒に暮らしているが、私たちはお互いに相手を良く知りすぎている。流刑や監獄の生活で何ととっても悲しいことは、人間の本性がむき出しになり、その卑小な面がすべてさらけ出されることだ。何よりも悪いことに、人間の卑小な面しか見えてこないのだ。立派な特質を示す余地がないのである。私の同志と私は今では別の部屋で暮らしており、滅多に会うことはない⁴⁸。」

流刑地（抑留地）で人間の本性がむき出しになることは、第二次大戦後にソ連へ抑留された日本人将兵の間でもよく語られているところである。生死を分ける飢餓、極寒、重労働の「シベリア三重苦」は、軍国主義者たちを自己中心的な性質へと変えた。日本人捕虜同士による食料の奪い合い、他者の密告、他人のモノを盗む行為、労働回避のための自傷行為がいたる収容所で発生し、みな疑心暗鬼になった。日本人の収容所でも、些細なもめごとが軸となり日常が展開した⁴⁹。コーバやスヴェルドロフには、「シベリア抑留」のような計画経済に従った重労働はなかったが、飢餓と極寒は十分に流刑者に生死を意識させて「人間の本性をむき出し」にした。だからこそスヴェルドロフは、彼自身が生き延びるために、「本性をむき出す」コーバの「我儘」から離れて暮らすことを選んだ。

他方、「個人主義でありすぎる」と思われていたコーバも、自身が生き延びるために必死であった。脱走計画を立てていた時のコーバの様子は、既婚者で愛人でもあったタチアナ・スロワチンスカヤへ宛てた手紙から読み取れる。

「タチアナ・アレクサンドロヴナ、こんなことを書くのは恥ずかしいが、ほかに方法がない。一私の必要は緊急を要する！私には一文もない。私の生活必需品はみんな無くなってしまった。金は少し持っていたが、暖かい衣類、靴、食料にぜんぶ使ってしまった。そういう物はここではとても高い……本当に分からない、自分がどういうことになるかとしているのか。誰か友人たちを動かして 30 ルーブル都合してもらえないだろうか。ことによったらその後でもっと多く。それは私を救ってくれるだろう。早ければ早いほどよい。冬たけなわなので（昨日はマイナス 33 度）……君ならこれができるかと期待している。だから、どうか始めてくれたまえ。さもないと「カラシニコフ取引所のグルジア人」は死んでしまうことになる……⁵⁰」

コーバから知らせを受け取ったタチアナは、彼に衣類や下着を送った。そしてコーバは立て続けにタチアナに金を無心した。

「私は切羽詰まっている。あげくに病気になった。肺の咳が出る。私にはミルクとお金が必要だ。私は何も持っていない。もしお金ができたなら、すぐに送ってくれたまえ。これ以上待つのは耐えられない⁵¹。」

⁴⁸ 同上、76 頁。

⁴⁹ 抑留体験者らの体験を収集したソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会『捕虜体験記』全 8 巻などでも度々語られている。

⁵⁰ モンテフィオーリ、前掲書、456 頁。

⁵¹ 同上、457 頁。

この後脱走計画を警察へ密告するマリノフスキーには、次のように手紙を書いている。

「—前略—私はこれほど恐ろしい状況を経験したことがこれまでなかった。金がぜんぶ無くなった。気温が下がるにつれて（マイナス 37 度）、たちの悪い咳が出るようになり、健康状態が全般的に悪くなっている。そして私には生活必需品がない。—中略— 友よ、私は金に困っている。この冬をどうやって越したらいいのか分からない⁵²。—後略—」

タチアナやマリノフスキーに対するコーバの態度は、他の流刑者たちへの冷たい態度と異なるものである。自身の置かれた苦境と窮状を訴え、弱さを見せつつも、同時に図々しく金品を要求しているところが興味深い。また、1915 年の冬は、レーニンと、革命家でユダヤ系ロシア人のグリゴリー・ジノヴィエフ（Grigory Y. Zinoviev）宛の手紙に次のように書いている。

「私はどうしている？ 私は何をしているのか？ 私は調子がよくない。私はほとんど何もしていない。それに真面目な書物が完全に欠乏していて私に何ができよう？ ……私のこれまですべての流刑で、ここのように惨めな暮らしをしたことはなかった⁵³。」

コーバはスヴェルドロフとの決別について、次のように分析している。「スヴェルドロフは夕食のあと、皿やスプーンを洗うのが常だった。それに対して私は一度もしなかった。私はただ食べ、皿を汚れた床に置いておく。犬が何もかも舐めて綺麗にするだろう。しかしあの相棒は清潔さに情熱を抱いていたのだ⁵⁴。」共同生活における家事労働への不参加は、当然不和を引き起こしただろう。スヴェルドロフがコーバを「日常生活であまりに自分勝手にやろうとしすぎる」と言ったのは、コーバのこのような態度も含まれていたことだろう。

しかし極北地域における刺激のない単純な生活の中でも、コーバは一縷の望みを失ってはいなかったようで、クレイカに移ってから民族問題の研究、英語、ドイツ語の勉強を続けていた。1914 年 5 月ジノヴィエフ宛の手紙には、「私は書物を待っている。」「何か英語の雑誌も送ってくれたまえ。（古い、新しいは関係ない—ここには英語のものが何もないのでリーディング用だ。練習を何もしないと、これまで身につけた知識を失ってしまうのではないかと心配だ……）」と書いている⁵⁵。この時期コーバは民族問題に関する論文を執筆し、雑誌社へ送っている。

クレイカでのコーバの生活は勉強だけではなかった。単独で狩猟や釣りに出かけ、獲物を捕らえては帰宅する生活を送っていた。オスチャク人はコーバに狩猟生活を教え、コーバはそれを学んだ⁵⁶。この生活の中でコーバの健康状態は改善へ向かってもいたようだ。1915 年末に書いた手紙で、彼は次のように書いている。「私は以前のように生活しています。気持ちよく感じています。完全に健康です。私はここらあたりの自然に慣れてしまったに違いありません。そしてこの自然は荒々しいものです。三週間前には気温がマイナス 45 度に達したのです⁵⁷。」

⁵² 同上、457 頁。

⁵³ 同上、481 頁。

⁵⁴ フレヴニョーク、前掲書、62 頁。

⁵⁵ モンテフィオーリ、前掲書、472 頁。

⁵⁶ 同上、478-479 頁。

⁵⁷ フレヴニョーク、64 頁。（スターリンの妻ナジェージュタの母宛の手紙）

そしてクレイカでの生活の中盤から、友人ペトロフスキー宛の手紙には次のように書いている。「私が自分の刑期をぜんぶ務めないだろうといううわさを誰かが広めている。何という馬鹿げたことだ！私は誓うし、絶対に約束を守るが、そういうことは起きない。自分の刑期が(1917年に)終わるまで流刑地に留まる。これまでは時々脱走を考えてきた。しかし今はそういう考えを最終的に退けた⁵⁸。」この発言はマリノフスキーのスパイ事件が公になったあとのことである。そして1915年冬に、コーバはジノヴィエフ宛に次のように書いた。

「やっとのことで君の手紙を受け取った。一中略—真面目な書物が完全に欠乏しているのに私に何がきよう？……私は沢山の問題と主題を胸に温めている。しかし、資料がないのだ。死ぬほど書きたいのに、勉強する手立てが何もない……君は私の財政について尋ねている。なぜ君はそのことを尋ねるのか？君は恐らく金をいくら持っている。—それを私に分けることを考えていないか？それなら、どうぞ！ぎりぎり間に合うこと請け合いだ⁵⁹！」

1916年10月に、コーバは仲間の流刑者たちと共に第一次世界大戦への従軍のための徴集令を受けた。クラスノヤルスクに到着したコーバは、身体検査を受け、腕の怪我を理由に「軍務不適格」と判定された。この話はスターリンが政権を掌握して大元帥になることから、スターリン期のソ連ではタブー視される話題となった⁶⁰。不適格となったコーバは、鉄道町アチンスクに送られ、そこで同じく流刑者となっていたレフ・カーメネフ(Lev B. Kamenev)らとしばらく過ごしたのち、ペテルブルグへ行き革命に参加することになる。アチンスクでコーバと共に過ごした流刑者バイカーロフは、カーメネフと談笑するのは知的な喜びであったが、コーバは大抵むっとりして余りしゃべらず、静かにパイプをくゆらせていたという。カーメネフの妻が、煙に咳き込んで、パイプをやめてくれるよう懇願したが、コーバは一顧だにしなかったという⁶¹。「個人主義でありすぎる」コーバに「シベリアの小さなかけら」がくっついて、より頑なになったためかもしれない。

おわりに

1947年にモロトフは「スターリンの中にはシベリアの小さなかけらが残りの人生のあいだ引っかかって残っていた」と言った⁶²。コーバは、シベリアへの流刑、特にトゥルハンスクとクレイカでの外から隔絶された生活の中で、自らの人生や自分自身について良く考えたはずである。この忍耐の時間に様々なことを経験し考えたスターリンは、革命下のペテルブルグへ戻ったのちに、『プラヴダ』の編集部員として記事を書き続け、そしてレーニン亡きあとの権力闘争に勝ち政権を掌握した。この強靱な体力と彼の「強さ」は、スターリンが「シベリアの小さなかけら」を抱えていたからかもしれない。(もちろんレーニンとの接触、革命期の欧州への旅も彼を成長させた要因であることは明白である。)

⁵⁸ モンテフィオーリ、前掲書、482頁。

⁵⁹ 同上、489頁。

⁶⁰ ジョンジュ、前掲書、82頁、モンテフィオーリ、前掲書、498-499頁。

⁶¹ ジョンジュ、同上、82-83頁。

⁶² モンテフィオーリ、前掲書、497頁。

さて、本稿はスターリンの神学校時代と流刑期の様子を考察し、のちに独裁者として君臨するスターリンの人となりの一部を垣間見ようと試みたわけであるが、この中でスターリンの転機は3つあったことを最後に確認しておきたい。一つはゴリ神学校への進学である。ここで教師たちからの上からのロシア化政策に直面したスターリンは、自身の中にあるよりグルジア的なものを探し始めることになった。その結果、若干10代にしてグルジアの民族、帝政ロシア内の社会不安、グルジアの中の貧困や労働者の現状に目を向けることになった。第二に、神学校を退学して革命運動に参加し始めたことである。神学校が既に多くの抵抗者を生んでいたから、これはスターリンに特別見られた事情ではなくて、同校の生徒が歩む自然な流れであったかもしれない。それでも母親の期待に背いて優等生から問題児へ転落し、革命運動へ参加したことは、スターリンの転機と言えるだろう。そして第三の転機は、繰り返しの逮捕とシベリアへの流刑である。シベリアへの流刑は、グルジアの生活しか知らなかったスターリンの「異国」体験であったと言えよう。シベリア流刑中の回想を追って興味深かったのは、スターリンと共同空間にいる流刑囚仲間たちが、彼に多くの不満を持っていたことである。共同生活をしたスヴェルドロフはもちろん、その他の流刑者たちも、スターリンの自己中心的な態度に不満があった。他方で、スターリンはそのような周囲の声に耳を傾けることは一切なかった。それどころか、自ら孤独な状態を作り、現地住民と過ごすことを選択した。つまり、言語や習慣を共有できる「同胞」の流刑者ではなくて、世間を知らない、ロシア語をおそらくは話せなかったシベリアの少数民族との共同生活を選んだ。これはスターリンが希望を失いその日暮らしの日常を送っていたかのように思える話だが、そうではない。なぜならスターリンと友人たちとの手紙のやり取りを見ると、金品の無心や流刑先での窮状を訴え、そこから脱出させてくれるよう助けを乞う姿が見受けられたからだ。そして、静かに一人勉学に励み民族問題に関する論文を書き、その後に訪れるだろう革命へと向かう長い準備ともとれる姿勢も見せていた。独裁者スターリンを作ったのは、大衆の政治参加や社会主義思想の拡大、計画経済、帝政ロシアの政治的・社会的矛盾、革命と内戦、資本主義諸国との戦いという外的要因がまず挙げられるが⁶³、鋼鉄の男スターリンを理解するうえで、スターリンの持つもともと個性や彼が多感な青年期に受けた教育、そして何よりシベリアへの流刑を考察することは十分意義がある。権力者側にたまに見られる、なぜこのような判断をしたのか、なぜこのような不可解な行動をとったのかを理解するためには、生い立ちから振り返ることも必要であろう。昨今の国際情勢では、国の指導者の人となりや個人のバックグラウンドを検討する必要がより生じているように見受けられる。本稿がスターリンの青年期を理解する一つの視座となれば幸いである。

参考文献

- 1) 横手慎二『スターリン「非道の独裁者」の実像』(2022 第8版) 中公新書(初版は2014)
- 2) アレクス・ジョンジュ(中澤孝之訳)『スターリン』(1989) 心交社
- 3) 木村英亮「ザカフカース時代のスターリン」(1979) 横浜国立大学人文紀要第一類哲学社会学 15-32 頁
- 4) サイモン・セバーク・モンテフィオーリ(松本幸重訳)『スターリン 青春と革命の時代』(2010年) 白水社
- 5) アレクサンドル・ダニロフ他、(吉田衆一監修)『ロシアの歴史 下』(2011) 明石書店
- 6) オレグ・V・フレヴニョク(石井規衛訳)『スターリン』(2021) 白水社

⁶³ 立石洋子「スターリン」下斗米伸夫編『ロシアの歴史を知るための50章』明石書店、2016年、183頁。

